



くらげのうしろをうらぐ味増はく人をもはなれり  
 くらげのうしろをうらぐ味増はく人をもはなれり  
 とあつたに霧よふくもはなれり人をもはなれり  
 けあつたに霧よふくもはなれり人をもはなれり  
 はくもはなれり人をもはなれり人をもはなれり  
 かあつたに霧よふくもはなれり人をもはなれり  
 そあつたに霧よふくもはなれり人をもはなれり  
 りとあつたに霧よふくもはなれり人をもはなれり  
 雲よふくもはなれり人をもはなれり人をもはなれり  
 馬よふくもはなれり人をもはなれり人をもはなれり

おもひのこころをうらぐ味増はく人をもはなれり  
 あつたに霧よふくもはなれり人をもはなれり  
 けあつたに霧よふくもはなれり人をもはなれり  
 はくもはなれり人をもはなれり人をもはなれり  
 かあつたに霧よふくもはなれり人をもはなれり  
 そあつたに霧よふくもはなれり人をもはなれり  
 りとあつたに霧よふくもはなれり人をもはなれり  
 雲よふくもはなれり人をもはなれり人をもはなれり  
 馬よふくもはなれり人をもはなれり人をもはなれり

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

あはれはあはれをうたふ

吾吟我集 卷之六 下

今夕此宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵

一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵

一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵

一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵

一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵

今夕此宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵  
一宵 一宵 一宵 一宵 一宵 一宵

あんとくろのりつものまやわくはちんをたれんは  
 せりうしてきつひのしんをたれんをたれん  
 吟——はくつんとのせうをよひてをたれん  
 一——うらむるうらむるうらむるうらむる  
 すまむるうらむるうらむるうらむる  
 ゆくらぬあまらちのりはくぬ富士のもの  
 れんをたれんをたれんをたれんをたれん  
 比らむるうらむるうらむるうらむる  
 友よとのび高きとみのけの木の葉に  
 比らむるうらむるうらむるうらむる

あんとくろのりつものまやわくはちんをたれんは  
 せりうしてきつひのしんをたれんをたれん  
 吟——はくつんとのせうをよひてをたれん  
 一——うらむるうらむるうらむるうらむる  
 すまむるうらむるうらむるうらむる  
 ゆくらぬあまらちのりはくぬ富士のもの  
 れんをたれんをたれんをたれんをたれん  
 比らむるうらむるうらむるうらむる  
 友よとのび高きとみのけの木の葉に  
 比らむるうらむるうらむるうらむる



人のちもなほくら箱とていふひもまじり  
 たが一帯の心の海ははげなるものなり  
 ちよはくし綱本女のちがらふまじり  
 母も花もなほくら箱とていふひもまじり  
 一帯のちがらふまじり  
 ありまじり  
 まじり  
 ちよはくし綱本女のちがらふまじり  
 母も花もなほくら箱とていふひもまじり  
 一帯のちがらふまじり  
 ありまじり  
 まじり

ちよはくし綱本女のちがらふまじり  
 母も花もなほくら箱とていふひもまじり  
 一帯のちがらふまじり  
 ありまじり  
 まじり  
 ちよはくし綱本女のちがらふまじり  
 母も花もなほくら箱とていふひもまじり  
 一帯のちがらふまじり  
 ありまじり  
 まじり

今宵は月夜に  
 花の影をうけて  
 静かなる心  
 思ふに  
 昔の夢を  
 見るに  
 涙の跡は  
 今も  
 残るに  
 月夜に  
 花の影を  
 うけて  
 静かなる心  
 思ふに  
 昔の夢を  
 見るに  
 涙の跡は  
 今も  
 残るに

大木の影をうけて  
 静かなる心  
 思ふに  
 昔の夢を  
 見るに  
 涙の跡は  
 今も  
 残るに  
 月夜に  
 花の影を  
 うけて  
 静かなる心  
 思ふに  
 昔の夢を  
 見るに  
 涙の跡は  
 今も  
 残るに







宝やりゆへり乃そあだりゆへりゆへり  
 ひよき。まじりのゆへちやあてあかん  
 それの中も。ちからゆへりゆへりゆへり  
 花軍とまじり。ゆへりゆへりゆへり  
 母執るゆへりのゆへちやあてあかん  
 まじりゆへりゆへりゆへりゆへり  
 参りゆへりゆへりゆへりゆへりゆへり  
 うへりゆへりゆへりゆへりゆへりゆへり  
 ちやあてあかん。ゆへりゆへりゆへり  
 ちやあてあかん。ゆへりゆへりゆへり

しなまゆへりゆへりゆへりゆへり  
 あてあかん。ゆへりゆへりゆへり  
 ちやあてあかん。ゆへりゆへりゆへり  
 ちやあてあかん。ゆへりゆへりゆへり  
 ちやあてあかん。ゆへりゆへりゆへり  
 ちやあてあかん。ゆへりゆへりゆへり  
 ちやあてあかん。ゆへりゆへりゆへり  
 ちやあてあかん。ゆへりゆへりゆへり  
 ちやあてあかん。ゆへりゆへりゆへり  
 ちやあてあかん。ゆへりゆへりゆへり  
 ちやあてあかん。ゆへりゆへりゆへり

花あけのきりぎりすのわが寝るの鼻  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ

花あけのきりぎりすのわが寝るの鼻  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ  
 のよしのすぢのたけのたけのたけのたけ

吾吟我集

一 底本

所藏者 信多純一氏。

体裁 大本一冊。但し合冊、本来は二冊。二七・五×

一八・一糎。

表紙 原装か。縹色地に卍つなぎ牡丹唐草模様を空捺。題簽 なし。表紙左肩に剝落あとがある。底本と同板

の天理図書館蔵一本(図書番号917・2-501)には原題簽を存し、表紙左肩に白色無辺「吾吟集上(下)」とある。寸法は上が一六・七×三・一、下が一七・二×四・〇糎。

板外(のど)

原則として各丁裏の板外に「上ノ一」の如くある。底本は横の寸法が短く、そのため板外部分が断ち落されて、その多くは確認することができない。今、同板の天理本(前掲)を参照するに、おおむね次の如くである。

上、「序一」(一十三終。このうち十三終だけは表の板外にある)。本文に入り改めて「上ノ一」(一廿三終。このうち廿一と廿三終は表の板外

解題

にある。

下、「下ノ一」(一卅六。このうち廿三と卅四は表の板外にある)。

刊記 「於洛陽四糸寺町／前川権兵衛尉梓板」。

内題 「吾吟我集」。

蔵書印

上の第一丁表に「待賣堂」、下の最終丁裏に「江戸四日市古今珍書僧達摩屋五一」(三行)。ともに朱陽刻。

二 諸本

『吾吟我集』の諸本は、初版である京都前川版と、その覆刻版とに大別される。後者の版元は江戸伏見屋、大坂柏屋、大坂河内屋、大坂扇屋と転々し、又「狂歌集要」と改題されたものもある。

初版の前川版はいつ出たのであろうか。未得の自序に「慶安二年四月中旬に題なきに筆をくはへて」とある。また、寛文六年の『古今夷曲集』の引用古書目録に「未得吾吟集六十四首」とあるから、それ以前の刊行であることは明日である。しかも『古今夷曲集』の跋文には「承

応乙未元日」とあるから、承応四年までには一応の編集が終っていたのではないか。とすれば、『吾吟我集』の刊行もそれ以前にさかのぼることになる。やはり未得の序に見える慶安二年には刊行されていたものであろう。

江戸時代の書籍目録類の記載を見ると（以下斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』による）、寛文無刊記書籍目録に

二 吾吟我集

寛文十年刊書籍目録には、

二 吾吟集 江戸未得作  
古今集をなす

とあり、以下寛文十一年、延宝三年、天和元年、元禄五年、同十二年のものはほぼ同様である。元禄九年、宝永六年、正徳五年のものには、

二 長尾藤 吾吟集未得二五五分

とあるから、当時の版元は京都の長尾藤兵衛であったこと、値段は銀二匁五分であったこと、外題が「吾吟集」のままであったことなどをうかがい知ることができる。

この初版本は、長く売られたわりには伝本が少ない。調査した範囲では、底本のほかに、天理図書館の前掲一本及び別の一本（図書番号917・2-501⑥。上のみの一冊）

近体の狂歌諸題をそなへ、よくよみかなへ、しかも句く面白きは、此集に過るはなし。昔時京師に板行ありけるか、今絶てなし。いよく久しきを経て亡失せんことを惜みて、醵刻するものなりし。

宝曆七年丁丑冬日緑竹園主人題

この筆者緑竹園主人なる人物の素姓は明らかでないが、林若樹氏は幕府の医官野呂元丈ではないかとして居られる（名著全集「狂歌狂文集」解題）。

この「狂歌集要」なる書名は、明和九年の書籍目録にも、

二(冊) 同(狂歌)集要 石田未得

と見え、又安永五年柏原屋刊『吾吟我集』や同年同書肆刊『卜養狂歌集』巻末掲載の「永昌堂板行書目抜書」中にも、「吾吟我集」石田未得詠  
一名狂歌集要とある。

伏見屋版は他に天理図書館の一本（図書番号917-2-501⑥。大本二冊）を見ただけである。同本は原題簽を欠き、「吾吟我集」として登録されているが、刊記・版相等からして、本来は「狂歌集要」の題簽を有したものと考える。

のみであった。以上のように、『吾吟我集』はおそらく慶安二年に初版が出て、板木はそのままで、長い間ぼつぼつと売られていたものと思われる。その板木がくたびれて来て、新たに版木が作られたのは、宝曆七年のことらしい。

1、江戸伏見屋版—狂歌集要

初版の板木がくたびれて来て、新たにかぶせ彫り（覆刻）の方法で板木が作られた、その最初のものは、宝曆七年に「狂歌集要」と改題して出された。光丘文庫本によって大体を示す。

体裁、大本二冊。二六・七×一八・五糎。

表紙、水色地に菊唐草模様を空捺。

題簽、表紙中央上に白色無辺「狂歌集要一(一)」。

内題、「吾吟我集」。

刊記、「江戸日本橋北三丁目／伏見屋善六発行」。

内容は初版本にきわめて忠実精巧な覆刻であるが、濁点・句点はやや少なくなっている。最大のちがいは、未得の自序の前に次の序文のあることである。

吾吟我集は、慶安年中江都の石田未得か著す所也。

2、大坂柏原屋版—吾吟我集

安永五年になって、1の板木が大坂の柏原屋に移り、題簽を「吾吟我集」と改めて売り出された。東京大学文学研究室蔵本によって大体を示す。

体裁、大本二冊。二五・八×一八・二糎。

表紙、水色布目模様。

題簽、表紙左肩、白色無辺、「吾吟我集上(下)」。

刊記、「安永五丙申年八月従東都求板／浪華柏原屋佐兵衛」。

巻末二丁半にわたって「永昌堂板行書目抜書」があり、その末尾に「大坂心齋橋通伝馬町／柏原屋佐兵衛板」とある。柏原屋佐兵衛は、この同じ年、安永五年十一月に『卜養狂歌集』をやはり東都から求板して売り出している。

3、大坂河内屋版—吾吟我集

国会図書館蔵本により大体を示す。

体裁、大本二冊。二六・四×一八・一糎。

表紙、水色無地。

題簽、表紙左肩、白色無辺、「吾吟我集上(下)」。

内容は、緑竹園序、自序、本文とも1・2と同じ。本文